

岡崎市議会議長 様

支出番号	11
------	----

会派名 自民清風会
代表者名 小木曾智洋

下記のとおり、政務活動を実施したので報告します。

政務活動旅行報告書

令和4年 12月14日提出

活動年月日	令和4年10月12日～14日	
氏名	原田範次、蜂須賀喜久好	
用務先 及び 内 容	1	用務先 香川県小豆島町
	10月12日	内 容 オリーブの栽培による地域ブランドの確立及び農福連携について (株式会社 小豆島岬工房)
	2	用務先 愛媛県松山市
	10月13日	内 容 レモン栽培による有機質堆肥を使用した土壌づくりについて (株式会社 瀬戸内ゆうき農場)
	10月14日	用務先 広島県呉市
		内 容 「黄金の島再生プロジェクト」について (一般社団法人 とびしま柑橘倶楽部)
	用務先	
	内 容	
備 考		



行政視察調査報告書

報告者 原田範次

視察日	令和4年10月12日(水)	視察地	香川県小豆島町(小豆島岬工房)
視察内容	オリーブの栽培による地域ブランドの確立及び農福連携について		
視察者	蜂須賀 喜久好、原田 範次		

視察目的：岡崎市の農業後継者が減少している。人口減少の中において、岡崎市の農業の在り方として米麦以外の作物として、オリーブの栽培について現地調査を行った。

視察内容は下記に示す。



視察場所：香川県小豆島町(小豆島岬工房)

事業沿革：2005年両親とともに小豆島内でオリーブ栽培を始める。

2007年に「小豆島 岬工房」を設立。自家栽培苗木、スペイン産オリーブオイルの輸入販売を始める。

2009年にイタリア TEM 社の採油機 OLIO MIO 30 を個人として日本で初めて輸入し、自家製オイルの販売を始める。

2013年度ロサンゼルス国際エキストラバージンオリーブオイル品評会で金賞受賞。

2014年東洋オリーブを退職。

2015年8月株式会社小豆島岬工房として法人化、代表取締役就任する。

2016年12月現在、約1.2haの畑に、25品種（ミッション、ルッカ、ネバデイロブランコ、アルベキーナ、セントキャサリン等）成木300本、苗木1000本を栽培。

小豆島オリーブ100%の自家製エキストラバージンオリーブオイルは、和食に合う

マイルドさが特長。

視察1 : 現地では裏山の樹木を視察

Q オリーブの自家栽培による成果

1反30本の苗木植付を基準に8年前に会社設立、200坪からスタートして2.2ha
500本でオリーブを2トン収穫。10%のオイルを搾る

・1本で25kgの収穫をすると翌年減収する。剪定で7.8kg収穫に管理している。

今年の収穫は3.5トンを予定している。利益を出すには経営ビジョンが必要。

Q オリーブ栽培による観光振興

国産オリーブ油が和食にも利用されることが外国人を呼び寄せる一因にしたい。

視察を迎える事が観光に寄与すると考えている。それ以外は考えていない。

Q 農福連携の取組について

難しいと考える

Q 現在の課題、今後の展開

自己農園でのオリーブはボーナス収入、月の給料は輸入オリーブ油と考えて経営

戦略を組立てている。黒字化（利益）を得るのは難しいと感じた。

岡崎市への展開

- ・岡崎市の導入は困難と考えた、理由を下記に述べる。
- ・オリーブ油には、時代性を感じて視察には行ったが、害虫が多いことに驚く。

害虫	害虫による現象	対策（農薬）
オリーブアナアキゾウムシ	樹皮に穴をあけ、樹液を吸う、木を枯らす	スミチオン乳剤散布
ハキリムシ	オリーブの実に穴をあける	オルトラン水和剤
スズメガ（いもむし）	葉を食い荒らす樹勢を弱める（収量が減る）	幼虫を取る
コガネムシ（幼虫）	根を食べる（樹勢を弱めて収量が減る）	成虫を駆除

- ・オリーブ実の収穫は人力に頼るのと、高木になると高齢者が踏み台に乗っての作業は無理がある。障害者も同様に高所作業が問題となる。
- ・オリーブ油の搾油に専用機械が必要であり、委託するに問題点が多い。

同行者所感

本市農業に高付加価値の高い農産物としてオリーブについて 4 年前に鹿児島日置市に調査に入り、その際市の職員 2 名を半年間小豆島オリーブ園に研修に来ていることの説明を受け、改めて小豆島町のオリーブの小豆島岬工房に現状について伺った。

オリーブ生産にあたり設備投資に多額の費用がかかり個人経営は難しい。収穫時期が短期間のためマンパワー不足が起きる。外国産のオリーブの品質が向上してきている。後継者育成が難しい、などオリーブ経営の問題点の説明を受けた。なお調査の過程で日置市も計画の見直しが起きていることの説明を受けた。今一度検討することが必要と感じる。

行政視察報告書

報告者 蜂須賀喜久好

視察日	令和4年10月13日	視察地	愛媛県松山市
視察内容	レモン栽培による有機質堆肥を使用した土壌づくりについて (株式会社 瀬戸内ゆうき農場)		
視察者	原田範次 蜂須賀喜久好		

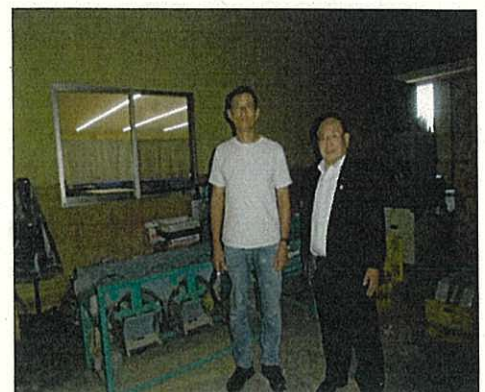
【視察目的】

令和4年7月に営農型太陽光発電について視察を行った。今般、農業において、農家の高齢化、後継者問題、耕作放棄地問題等、深刻な問題が山積している。本市ばかりでなく、農業の最大の問題は他産業に比較して農業収入の低さにより農業危機を招いている現状がある。農地を保全しながら高収入を得られるレモン栽培について実態調査の視察を行った。

愛媛県松山市の瀬戸内有機農場の桐野直代表さんに 農場の概要、有機農業にこだわった理由と取り組みをお聞きした。

8年前に全国JAの技術指導員を退職されレモン栽培を始められた。現在はレモンの果樹園1haを経営している。22年度は収穫量7t売上高560万円、23年度は収穫量28t、売上高2240万円、24年度は生産量40t売上高3200万円を目標としており、レモン1個80円の計算となる、10aあたりに換算すると320万円、米の20倍にあたる。

有機栽培を進めていく理由についてお聞きした。日本の農業は近年になり栽培技術が目覚ましく進歩してきた。作物を病気や害虫から守るために化学農薬を使用することで見た目にはきれいな商品が増え所得の増加につながり消費者にとって



より安く品質の良いものを選べることとなった。しかし化学肥料や農薬が環境や人体に与える影響が指摘されており、国や県は危機感を持っているが基準値内であれば使用は可能でその結果として土壌微生物や害虫の天敵を減少させている。土壌中の微生物が住めなくなり環境が一変している。そのため新たな農薬を開発するという悪循環が起きている。自然にやさしい農業を行うことは農家にとって手間がかかるうえ、収穫量が安定せず、見た目にも傷が増えて品質価値が落ちてしまう為経営面において課題となる。しかし有機質肥料を使用し、土壌を軟らかく保ち多くの微生物が住む肥沃な土づくりを行い、土壌本来の力を養うためには天敵等もうまく活用しながら、多様な生態系を維持することが植物の本来持っている力を引き出すことが出来る。

【本市への提言】

農家は有機質の堆肥を田畑に施肥を行って作物を生産することが人間、土壌内微生物にとっても有益な事は分かっているが労働時間と収益に整合しておらず、農業新聞アンケート調査の結果、消費者も同じ値段なら買うが80%、農家の54%が割に合わないため今後も生産するつもりはないと回答している。



有機質農業を行っている農家は皆無に近く、愛知県内においてレモンの栽培を行っている各自治体もない。

レモンの特性は、有機質を好み、4年目から収穫が始まり5年目には本格的な収穫量が確保できスピードが速い。温州みかんよりも農薬散布回数が50%と少なく、価格は5倍ほど高い、また収穫期間が5ヶ月と長く10a当たりにすると梨、葡萄と比較して袋掛け、とん付等の作業が無く労働

時間が少なくすむ。また国産のレモン供給が不足している状況が続いており、米の転作、耕作放棄地対策としても最適と考える。

<同行者の所感>

瀬戸内ゆうき農場（代表 桐野 直）を視察して、ミカン栽培跡地をレモンに切り替えている。

レモンは5年目で収穫量が計算できる事、収穫は1ha農場で5年目22年度7t560万円、23年度23t2240万円、24年度40t3200万円、1a当り320万円となる。

24年度長瀬の米、1俵9600円で、1a8俵76800円で40倍となる。

次世代農業にはSDGsの取組に有機農業がある。

今後岡崎市の農業にも十分参考にして行きたい。

行政視察報告書

報告者 蜂須賀喜久好

視察日	令和4年10月14日	視察地	広島県呉市
視察内容	「黄金の島再生プロジェクト」について (一般社団法人 とびしま柑橘倶楽部)		
視察者	蜂須賀喜久好 原田範次		

【とびしま柑橘倶楽部に黄金の島再生プロジェクトについて調査

一般社団法人とびしま柑橘倶楽部代表取締役社長クレセントの秦利宏社長に説明を受けた。

広島県はレモン栽培の発祥の地。広島のレモン栽培は1898年明治31年当時豊田軍豊町大長、現在の呉市豊町が始まりとされている。広島県は温暖で、台風の襲来、雨も少なくレモン栽培に適していた。全国のシェアの60%を呉市、尾道市、大崎上島町が生産しており、40%を呉市が生産している。呉市大崎下島は温州みかん大産地で明治から昭和20年頃まで黄金の島と呼ばれた。みかん1箱が今の価格で5万円程していた。その後苗木が全国に広がり現在に至る。

レモン栽培も行われて来たが、みかんと比較して糖度が無く、今一つ盛り上がりにかけて。本格的に見直されたのは平成20年頃、健康意識の高まりと糖度を避けることが相まってレモンに流れが起きた。その流れは年々増加してレモン不足が起きているほどである。

レモン栽培に切り替えたほうが、3倍以上の利益が上がる事は農家自身理解しているが、

温州みかんからレモン栽培に切り替えることがなかなか難しい原因は、生産者の高齢化、レモン栽培に切り替えるには5年の歳月がかかり、生産が出来るまでの時間的な余裕がないのが最大の原因である。日本産のレモンは今後需給のバランスを取り戻すことは大変難しいと考える。

【本市への提言】

秦社長の説明でも10a当たり米の5倍100万円の収益が上がり、レモンの皮、販売に適さないレモンは果汁にと全く捨てる場所が無い。この事は愛媛県松山市有機農法の桐野社長様も同じことを申されていた。また一番の魅力は高収益で投資



費用が少額、労働時間の短さ、収穫の時期が5か月間と労働の細分化が出来る、このような果物作物は他にない。本市の農業生産者の高齢化、年齢と収益の柱としてレモンが産業として成り立つか、厳しいところは有るが、健康志向、自然の健康食品としての追い風、レモンの認知度向上、この三点を見て、農業を支える方策の一つになることは間違いないと感じる。日本が目指すSDGsにも沿っている。

<同行者の所感>

呉市大崎下島「とびしま柑橘倶楽部」、株式会社クレセント 社長秦 利宏氏の案内と説明による視察をした。

・生産者の高齢化や後継者不足、外国産柑橘類の輸入販売による国産柑橘価格の下落が原因のすべてではないが耕作放棄された農園が増加した。農園の再生をレモンで島おこしに取り組んでいる。

・レモン栽培作業は農家に委託してレモンの6次産業化とPRを行う中で新規就農者の相談にもされている。

・プロジェクトに広島県、企業、農家、クラウドファンディングメンバーの他、広島県内の学生団体「STYLE」の参加を受けて若い力を加えて立ち上げている。

・地球温暖化に伴い農作物の対応、食の嗜好が西洋化、南国風が進んで飲み物にもアクセントにレモンを入れる風潮がみられる。

矢作町おこしにレモンが活用出来そうだ。